村野次郎創刊

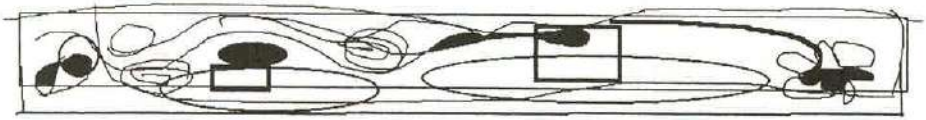
香蘭

2025年（令和７年）５月号

令和7年　新年本社歌会　小特集

第 102 巻　　第 5 号　　通巻 1133 号

二〇二五年（令和七年）五月一日発行（毎月一回一日発行）　香蘭　第一〇二巻第五号



香　　蘭

2025年（令和７年）５月号
令和七年新年本社歌会　小特集
第102巻　第５号　通巻1133号

目　次

村野次郎作品　私の愛誦歌（117）……三神　進…表二
招待作品　奇数月連載⑩　液晶のうす闇……加藤英彦…2
作　品
一……4
二……24
三……39
推薦香蘭集……46
香蘭集……47
作品一　十首選（三月号）桜井　京子選……14
作品二・三　十首選（三月号）高畠　憲子選……16
村野次郎への旅（181）昭和期の「香蘭」（十六）……千々和　久幸…18
続・酔風船（17）おもしろおかしく……千々和　久幸…20
一頁公論（48）生きててよかった……馬場　美信…21
令和七年　新年本社歌会　小特集……29
エッセイ・自由研究　童謡を聞きながら……小笹　岐美子…50
焦　点（三月号）数詞の働き……丸山　三枝子…52
七　首　抄（三月号）……宮原・脇谷・原（卜）・関口（洋）…54
作　品　評（三月号）　作品一……鈴木　桂子…56
作品二……伊藤　康子…58
作品三……松沢　みどり…60
香蘭集……沙阿　羅…62
緑　地　帯……有馬智賀子・大美賀一雅…64
明宝研究会第一六一回　二月例会　高野公彦歌集『水苑』研究…渡辺　礼比子…66
他誌に掲載された香蘭会員の作品と動向……72
歌会及び会合・会員消息・他……77
編集後記・新宿日記……82・表三
表紙絵……山口　蓬春「桔梗」　目次・緑地帯カット……和田　和雄

村野次郎作品　私の愛誦歌（117）

三神　進

わが据ゑしいしずゑの上幾重にも
鉄骨空に組みあがりゆく

『村野次郎歌集』

明宝ビルの工事がいよいよ地上の工程に入った光景の作。柱・梁の鉄骨幾重にも「空」に組みあがっていくと言う詩的な表現が緊迫した現場を和ませる。「わが据ゑしいしずゑ」は昭和四十三年に「まなかひに聳えんビルを浮かべつつゆるがぬ礎石今日ここに据う」と詠まれた定礎。まなかいに浮かべたビルが現実に上層へと組みあがってゆく。この光景を少し離れた場所から見ている作者の姿が浮ぶ。この年には溶接の火花、現場マンの様子など工事にかかわる作品がみられる。昭和四十三年から四十五年は「元現場マン」の私には興味深い歌が多い。愛誦歌には自社ビルの完成までの工程に注がれる優しいまなざしが感じられる。歌人・村野次郎がオーナーの明宝ビル。その着工から竣工までに参加できた建設会社の技術者や、専門業者のスタッフ達の何と言う幸運で誇らしい事か。「元現場マン」としても、何ともうらやましい。

（『村野次郎全歌集』119頁『村野次郎歌集』）

加藤　英彦

液晶のうす闇

「叩き」とは強窃せよという知らせ海こえてゆうべの指令がとどく
濡れた手につかむ札束どっと湧く雲、いちまいの空がせまいぞ
蹴るしばく、搏つ搾めあげる免許証コピーあの日の質(カタ)にとられて
真実が歪みはじめる初めからほんとうのことなんてなかった
放蕩の過ぎたる果ての闇バイト葡萄ひと房もぎて出でゆく
やりなおすには遅すぎて祖父ほどの背をゆがむまでバールで叩く
あれは秋のひかりのような米五キロ上京かなわぬ母よりとどく
雨を吸う砂上のかわき痕跡は消されてテレグラムの文字列
捨て駒と気づいたときは囲まれていたりきフラッシュの燦きに
高収入即日払いに挿し入れた指いっぽんの闇はふかくて

清一（きよかず）伯父も死者の軍靴を奪ったかその時
すまんと声をかけたか

これは加古陽歌集『夜明けのニュースデスク』にある。昭和二十年五月二十日、伯父はレイテ島で戦死したという。その命日や戦死公報に加古は疑いをもっている。凄絶な戦闘の果てに物資の補給も全て途絶えて、九分九厘餓死ではなかったかと推測する。

太平洋戦争の日本陸軍の多くが無謀な作戦の果ての餓死病死であったことはよく知られる。大岡昇平の「野火」ではないが、全き生の極限状況のなかで餓死した戦友の軍靴を奪うなどいくらもあったろう。清一伯父はどうであったか。そのとき「すまん」と心のなかで呟いたかと加古は問いかける。

加古は東京新聞の編集委員である。かつて取材でニューギニアの激戦地ビアク島にも赴いた。長い記者生活のなかで報道する事実の重たさは身に沁みて知っている。この一冊にはそんな新聞記者加古陽治と歌人加古陽の目が交錯する。記者の目は幾層もの事実の向こうに揺曳するものを徹底して探ろうとする。それは事件の深層にねむる真実に届こうとする目なのかも知れない。

一方で、事件は報道したら終わりなのではない。そこから歌人加古陽の問いが始まる。真実など誰にも分からないし、単純に善悪を腑分けする愚に与するつもりもない。清一伯父への問いかけは、翻って応答のない問いを自らのなかに抱え込むことである。

「小癪」という見出し躍れる夕刊の知らないことは恥ずかしいこと
一日に一枚めくる日めくりの戦後七十年
のギザギザ

一首目は「都新聞昭和17年4月19日夕刊」と詞書きにある。わたしが調べたのは同日づけの讀賣新聞だが、一面には「帝都空襲の敵機撃退」「九機撃墜、我方損害軽微」の文字が大きく躍る。「知らないことは恥ずかしいこと」の「知る」とは、知らせる立場の新聞が大本営発表に諾々と盲従した戦争責任への反省であったか。戦後七十年の屈折が忘却の歳月であってよいはずはない。

薄雲に白くけぶれる名残りの月　きょう
本当を伝えられたか

本集は〝知る〟ことと〝本当〟ということを切実に問い続けた一冊である。一片の事実から想像する力の大切さを教えられた。

四選者の作品

一週間

平塚　千々和　久幸

一週のたちまちに過ぎ事もなし水仙の花に誰か寄りゆく
一筋に思い詰めたる恋情も葉牡丹に日の射せば忘れん
白蓮の花を愛でつつ酒汲みし父いくたびか歌に詠みきつ
トランプが何を言いしか知らざれどこの木偶坊に与する気はなし
あれほどに熱弁揮いし地位協定総理となれば沈黙したり
「答なき事態に耐える力を」とNegative Capability　いま問われおり
酒飲まぬ日はなし一週七日間恙なかりきわが心身に
ことさらに歌に詠むほどのことはなしかく凡庸な一週間を

手のひらに

横浜　渡辺　礼比子

そのむかし敵わぬ母でありしかど惚けたるまま十五年生く
「弁当を作ってもらったことがある」亡き母に花を手向けくれつつ
「走るな」と「急げ」を同時に言われつついつしか拗けた妻となりしよ
みかん剥く音かと聞けばルービックキューブすらしも　微睡の縁に
蝋梅に次ぎて白梅匂いおり主失せにし隣家の春
歌会後のほとぼり冷めず流れ来てビッグエコーに歌う「デザイア」
手のひらにあなたがそっと置きくれし蝋梅のはな真夜を匂える
いま少しいま少しとぞ我慢してビルの端につと覗く月しろ

足元灯

鎌倉　髙畠　憲子

転倒をきつかけにして母も父も第四コーナーに突入したり
われらまで転けるわけにはゆかぬゆゑ階に点せり足元灯を
われよりも遅く寝る夫のセットせる足元灯のともる明け方
踏み外してよいのは親らを見送った後のこと　そんな季節が来るか
蝋梅も紅梅も観るいとまなく一月二月逝きてしまへり
ゆつくりと急いでをります　池の辺の石が動きて亀となりたり
今日、明日かと義母の旅立ちに備へれば不意に言はるる「イッテラッシャイ」
危篤の日日いつのまにやら脱出し義母さまがまた空を見てゐる

夢の覚め際

我孫子　丸山　三枝子

紅葉のハナミズキ空に燃えながら病む人多き冬に入りゆく
マンションの窓々に灯の点りたり独り酌みいる人もあらんか
なるようになるさと思い決めたとき蛇口の水がぽとりと落ちた
あらたまの年の初めに来る目眩めくるめく思いなどはあらざる
亡き父に呼ばれた声に目覚めたり窓の向こうの雪の明るさ
明け方の夢の覚め際きっぱりとおまえは来るなと言いしは誰か
抜け道のかたわらにさく白梅よ、生き残りたる一人のような
言うほどのことでもないが事ありて過ぎれば春の海を見に行く

作品一　十首選

（三月号作品から）

桜井京子　選

・博多産のとんこつラーメン食いており死ぬまでわたしは九州が好き

千々和久幸

豚骨ラーメンは昭和の初め、福岡県を発祥の地として始まったと言われている。白濁した濃厚なスープは栄養価が高く、豚骨ラーメンの人気は九州から今や世界に広がっている。北九州出身の作者にとって、豚骨ラーメンは幼い頃から馴染んだ味であったものか。ふるさとを離れて暮らす者にとって、子どもの頃の味は忘れ難いが、作者の郷里へのこだわりもまたひと方ではない。

この歌の眼目は下句にあり、生きている限り九州に思いを馳せる、つまりは骨になるまで故郷は忘れ難い、と言っているのだ。

・佳きことのいよよ寄せくる新年にと着信ベルを波音に替ふ

髙畠　憲子

ケータイの着信音には様々なバリエーションがあり、時々変えて楽しんだりするが、作者は年が改まるのを期に変更したようだ。鎌倉在住の作者であれば、波音は日常的に耳にしている音でもあろう。佳き知らせが波音に乗って届くよう、新たな年に願いを込めると、ややこじつけの感はあるが、そこは気にすることもない。

何が起こるか分からない世の中である。折々の穏やかな波音が、作者に幸運をもたらしてくれるよう願っている。

・師走とて慌ただしき事なかりけり閑居自在の歌詠みなれば

青山　侑市

師走ともなれば、多くの人は気忙しく動き回るものだが、作者はもはやそんな世間から超越した日々を送っているという。「閑居」とは、世俗を離れて心静かに暮らすこと、とある。（「明鏡国語辞典」）何とも格好がいいではないか。しかも歌詠みの所以であると明言し、風流人の極みとも言うべきか。長く現役で働き、世の為人の為尽くしてきた作者である。その歳月の後に今日の安穏な日々がある。歌境の深まり著しい作者、益々お元気で活躍して頂きたい。

・与那国にゆきてどなんを呑むことも年来の夢　与那国遠し

伊藤美恵子

かつてどんな夢を描いていたか、年齢を重ねるうちに忘れてしまいそうになるが、作者は改めて思い出してみたのだ。「どなん」は、沖縄県与那国島で作られる泡盛の名前。国内最強六十度とも言われる「どなん」は、昨今入手が困難となっており、幻の名酒と言われている。それならぜひ現地に行って飲んでみたいもの。ところが作者の描く夢はこればかりではない。あれもこれもと願いつつ、残り時間を意識せざるを得ないところにいるのであろう。与那国は遥かな憧れの場所、年来の夢の象徴として作者の中で輝いている。

・招かれて座したる部屋のテーブルのクロースあでやかあなあなかしこ

岩田　明美

このひとつ前に新築の家の歌があり、作者は新築の家に招かれたのであろう。何もかもがお洒落で新しく、目を瞠る作者である。中

でもテーブルクロスの上品な美しさに目を惹かれ、発した言葉が「あなあなかしこ」。「あな」は「ああ」「何と」などの感嘆詞。「かしこ」は、「おそれ多い」の意味である。反射的にこんな言葉が口を衝いて出たのだが、この大仰な言い方には笑ってしまう。自分の日常とは少し違う暮らしぶりを見て、悪戯心が湧いた作者。その悪戯心が楽しい。歌人の鋭い目が働いたというべきであろう。

・農船ゆ海に落ちたる三歳が九十歳を生き祝われて居る

柏原　義清

今年めでたく卒寿を迎えた作者だが、幼い頃に海に落ちて危うく命拾いしたというのだ。農船とは、瀬戸内海の島々を行き来して人や蜜柑などを運ぶ小型船である。どんないきさつで海に落ちたものか、あの時、一歩間違えば死んでいたかも知れない。九十歳まで生きて、そんな思いが去来する。三歳の頃、運命の分岐点で幸運に恵まれ、作者はその後の人生をどう生きたのか。短歌で言い残したいことはまだたくさんありそうだ。

・虹の色せきとうおうりょくせいらんし潜らんとして鳥が羽ばたくか

中村かよ子

不思議な歌である。一読して意味が分からなかった。だが初句で「虹の色」というからには、呪文のような「せきとうおうりょくせいらんし」には意図がありそうだ。何のことはない「赤橙黄緑青藍紫」を音読みして、虹の七色を覚えやすく述べているのである。下句は「せいらんし」から韻を踏んで、言葉遊びをしていると読める。知ってしまえばそれだけのことだが、知識をひと捻りして、詩の高みに打ち上げた手腕は見事と言わざるを得ない。

・こんなとき辞めたいとひとは思うだろう窓から机を捨ててみよう

松沢みどり

「残業」とタイトルのある一連の中の一首。社内の残業時間のランキングに入るほど残業が続いているというから、疲れがピークに達しているのだ。疲れによって心身のバランスが崩れやすくなり、窓から机を投げ捨てたいという衝動はすさまじい。作者に短歌があることが救いとなっていれば幸いである。「香蘭」には数少ない現役の職場詠を詠む作者に期待している。

・何時までも古き家電を使うのは火災の元と息子うるさし

満木　好美

最近同居し始めた息子である。一緒に暮らすようになると、互いにあれこれ余計なことまで目についてしまうものらしい。息子の言っていることは正しいが、親には親の都合というものがある。ここで親子喧嘩が始まったかは読者の想像にまかせて、戻ってきた息子との生活を楽しんでいると読める。こんなやり取りの後、いずれまたふらりと出て行ってしまう息子かも知れないのだから。

・シルクロードの旅に拾いし枯胡楊ときには砂漠の風を恋うなり

八木橋洋子

世界各地に旅をして楽しんできた作者。胡楊は所謂ポプラの仲間で、砂漠でも逞しい生命力を見せる長寿の樹である。秋には鮮やかに黄葉するが、作者が拾った枯胡楊とは枯死した木片であろうか。シルクロードの旅は、日常では味わえない悠久の時の流れを感じさせるものであったろう。枯胡楊が砂漠を懐かしむと言いつつ、作者自身がまた旅に出たいと、遥かな旅への憧れを歌っているのである。

作品二、三　十首選

（三月号作品から）　高畠憲子選

・若き医師は緩和治療を話し出すまずは化療と何故に言わぬか
小原　裕光

病を得た奥様を詠む一連「気づかざりしを」からの一首。検査結果や治療方針を夫である作者が告げられる。医師から見れば多数の患者の中の一人に過ぎない。だが、それぞれ掛け替えのない人生を必死で生きている。化学療法を示さず、いきなり緩和治療を言われたという。驚愕と落胆、そして結句の怒りは察するに余りある。同一連に〈若き医師には他人事なれば〉とも詠む。若さゆえか、人柄か。誰もが経験するであろう医療の場面で、配慮を欠くこのような言動への告発とも読んだ。

・あかときの空よりつばさあるごとく凛ひながら雪降りはじむ
澤田久美子

作者の住まいは、この冬の大雪のニュースにも紹介された島根県の山あいの町。雪を詠まれた秀歌をよく詠まれている。この一首も印象深い。つばさあるごとく、の比喩が大変美しく、雪の降りだした最初の情景を余すなく表現。あかときの空の冷たさとあいまって、柔らかな詩情を醸している。積雪に不如意を強いられる生活の中、空を見上げ、詩を探す姿勢がほんとうに詩人なのだろう。

・海が好きでいつも海のうた唄うされど淋しい歌「海ゆかば」
三浦　伶子

デイケアでの活動をよく詠まれる作者。お仲間とよく歌を唄われているようだ。海の歌と言えば、一般に明るい曲が思い浮かぶ。だが、万葉の家持の長歌に由来するこの「海ゆかば」。荘重な名曲ながら、戦時中の戦意高揚や戦没者追悼の為に作られ、用いられたという暗い歴史を背負う。作者が、淋しいと思う理由であろう。戦争を体験していない筆者も含め、子や孫に伝えねばならない一つ。何気ない日常を詠みながら、忘れてはならない戦争を考えさせる歌。

・店の屋号思い出せない妻とわれ同時に言えり「不二家の向かい」
三神　進

ある年代になると、身につまされる状況。もの忘れは誰にも起こる生理現象だから恥じることはないし、この一首、お連れ合いが御同輩である幸がある。同時に言えりが、ユーモラス。老舗の「不二家」は全国に知られていて、この店名が生きた。「」の会話体を結句に据えるという構成も、夫婦の息の合った場面をよく表現している。

・洋梨のかたちいろいろ　テーブルに気むずかしさをころがしてみる
安田　恵子

洋梨には様ざま種類があろうが、よく見かけるラ・フランスの形状を想像した。丸い和梨と異なり、いびつ。歌に詠みたくなる素材である。そのいろいろな形が卓上にあることを〈気むずかしさ〉に見立てたところに作者の発見がある。ころがしてみる、という措辞も面白い。自分の気持とも、身近な人のそれとも取れて魅力がある。誰にもややこしい気分が多かれ少なかれあるが、とりあえず今日は

それを転がしてみる、というやり過ごし方は生きる上の知恵。それを教訓めかさず、しなやかに描く腕。文芸としてシンプルで深い。

・うす暗き診察室に籠る女医は素足に運動靴を履きたり

山下　紘正

連作から、眼科に行ったおりの嘱目とわかる。物をよく視る作者である。眼科の特に検査室はうす暗い。この中に終日籠るドクターの生活に思いを馳せている。この女医さんが素足に運動靴を履いている、という事実を述べているだけである。そこから、若くきびきびした女医さんの姿が立ち上がる。足元だけでもアクティブに、あるいは快適に、という女医さんの内面まで想像したのだろうか。何気ない描写から、読者には様ざまなイメージが広がる。

・ミカン不作に弟は買って送り来ぬミカン農家がミカン買うとは

生田　絹代

昨今の異常気象は、人々の普段の生活のみならず、農家の方々には甚大な被害が出ている。猛暑、雨不足、カメムシの異常発生等があったようだ。一首から弟さんのミカン農家の事情がうかがえる。例年、姉である作者の元に、丹精のミカンが届いていたのだろう。だが、今年の非常事態に弟さんも致し方なく、ミカンを買って送ってくれたのだ。下句に作者の気持ちが痛いほど出ている。

・手作りの農家の胡瓜の糠漬に原材料名こまごまとあり

内海　恭子

こちらも、農家の事情がよく出ている。自家製の胡瓜の糠漬が、売り物として店頭に並べられているようだ。昨今の衛生上の商品管理が反映されてであろうか。すべての商品に、原材料名や使用の調味料、添加物を提示、添付しなければならないのだろう。手作りのそれならば、胡瓜と塩、米ぬか、あるいは鷹の爪、くらいなものだろうに。そこは決まりに従って、こまごま書かされてあったのだ。皮肉が効いた一種の時事詠になっている。

・銀杏の葉尽きず降りたる昼下がり金色（こんじき）の中に飛び込んでゆく

大里　友江

銀杏の葉、金色（こんじき）とあれば、与謝野晶子の〈金色（こんじき）のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に〉を思い出さずにいられない。作者の頭の中にも、無意識に同じイメージがあったのではないだろうか。尽きず降りたる、であるから、ずっと雨のように降っている光景のようだ。素晴らしい景に出会った幸を思う。下句の、飛び込んでゆく、のところに、身体ごと金色の中に染まってゆくような、作者の率直な感慨が出ている。金色一色の見事な景が読者にも広がってくる。

・カレンダーの最後の一枚はぎ取りて私がリセットできたらいいのに

佐伯　弥生

自分をリセットしたい、という思いを詠んだ歌には、時々出会う。だが、その時と場合の設定がユニークであり、ハッとさせられた。はぎ取りて、も効いている。かなり強くこの一首の中に響いており、今の自分を何とかしたい、と言う気持が前に出ている。言葉の選び方の効果だろう。十二月のカレンダーをはぎ取り、まっさらな新年を迎える感覚と、真新しい自分になりたいという願望。リセットという現代語もこの一首に合っている。筆者など一年に一遍ではなく、毎日リセットしてみたい。

村野次郎への旅（181）

昭和期の「香蘭」（十六）

千々和　久　幸

今月から「香蘭」第五巻第九號（昭和二年＝1927年）年九月號を読むことにする。この号の表紙畫裏畫及題字は森田恒友、編輯兼発行者は田中次郎で九月一日発行、頁数59、本文のほかに巻末の広告に石川啄木歌集、詩集、遺稿、矢代幸雄「西洋名彫刻」が収録されている。例によって目次から見ていこう。

巻頭の短歌欄は九名で村野次郎、橋本敏夫、本間樂寛、冬野木枯、南部松若丸、川村浩、芥子澤新之介、橋本政一、杉浦翠子、次いで川村浩の随筆「伏鉢」を挟んで、第二短歌欄には眞島勝郎、成田憲三、松丸甦一郎、西村孝、住吉良康、日根まもる、若林昇、久米蒼月、庚申薫の九名。

前月歌壇合評は杉浦翠子、冬野木枯、南部松若丸、橋本敏夫。さらに長月集に杉本喜一、今福公一、大貫迪子など十四名。香蘭合評会は次郎、樂寛、松若丸。童戯百人一首、高原集（杉浦翠子選）、残暑集（酒井廣治選）、暁露集（筏井嘉一選）、遠空集（村野次郎選）と続き、壺中の天地、編輯後記である。

村野先生の巻頭詠は八首で例月より多い。

峡の空　　村野　次郎

八月下旬大熊信行、中川與一夫妻、池谷信三郎、南部松若丸の諸君と碓氷峠見晴臺に上る

①われもここに立ちてともしも山霧のしづくに濡れしまがき青竹（御野立所）

②峡の空にいまゝで見えし燕（つばくら）の聲（こゑ）かなしもよ濃霧の中に

③うち見れば日かげにじめる霧の中につばめ群れ飛ぶが次第に見え來（く）

④谷に下りて人行きにけむ呼ばへども山路をこめて深き夕霧

⑤まかげすれば淺間は裾に入りつ日のとどくあたりは小諸の邊（へ）か

⑥淺間の峰にたたなはる白雲の光もすでに秋づきにけり

⑦遠き麓は暮れはてて灯のともれるを指さしてわれらなつかしみたり（輕井澤）

⑧山路暮れて木群の闇の押しせまり路の上なる空ばかり見ゆ

忙しない都塵をはなれて解放された先生の一日が時系列に従って大らかに歌われている。今日から見ればいささか難解な歌言葉も、当時の歌人にはごく普通の表現であったのだろう。

①の「立ちてともしも」の「ともし」は「乏し」であろうか「羨し」であろうか、全体の構成から推測して前者と思われる。「心細い」の意と読んでおく。また「われも」の「も」はここに立った先人を思ってのことだろう。

「しづくに濡れし」は教科書で見た古典的な表現で、「あしひきの山のしづくに妹待つとわれ立ち濡れぬ山のしづくに」（萬葉集）などが思い出される

⑤の「まかげする」は目蔭、目蔭で古語辞典には第一義は「よく見えないものや遠くを見るとき、光線をさえぎるため、額に手をかざすこと」とある。

余談だがわたしの高校（福岡県立東筑高校）の校歌は折口信夫作（作曲は信時潔）で、一番は「筑紫の国の　国の崎　とほく霞て　海に入る　遠賀の水門も　望むべし　目翳をかざせ　潮境」と歌い出されている。ついでに言えば、恐らく日本では一番長い校歌で、夏の甲子園に四度出場したが、一番の歌詞が最後までテレビに流されることはなかった。

また⑥の「たたなはる」は「畳なはる」（重なりあって連なる。またたたみ重なる」で、こちらも歌人の教養のうちであったろう。

ただし③の「日かげにじめる」は「日陰」＋「滲む」であるのかどうか、広辞苑に「滲む」は「色がとけて散り乱れる」「墨・油などがしみ広がる」「液体などがうっすらとしみ出て広がる」とあり、辞書通りに読んでおこう。

次いで前月歌壇合評を読もう

心の花　　下村　宏

二月堂水取

・凡夫われ佛縁ありて八天の荒行を今しまさ目に見たり

・雨けむれど大佛殿の鴟尾光り杉むらの上に匂ひたるかも

（翠子）第一のお歌、私は佛教を知らないから、かういふお歌には批評が出來ません。

第二の歌は、寫生ですし、私も奈良へ行つたことがあるのでその景色は解ります。だが、「匂ひたるかも」はすこし色をつけ過ぎました。それに最初から「雨けむれど」と出したことは下手です。雨中にあの鴟尾の金色さんらんの景色を歌ふのは難つかしいでせう。

（松若丸）（一）の歌は報告以上更に効果あるものとは思はない。其の特異な語彙を以てしても救はれてゐない。（二）の歌にしてもこの對比は餘りに陳腐であり更に説明を出てゐない。光りと匂ふが離れているのも缺點であらう。共に吾人の胸を撲つ何物をも保ちえてゐない。

自然　　尾山篤二郎

・屋根草の穂をふきとばす風さへもいとひて一日こもらんとせり

・常ごとと物はいへどもいふうちにいきどほろしくなりにけるかも

（敏夫）唯事歌である。雑報歌である。風の一日をこもらうとする心持ちは勝れて落ち付いた心持であらうが、「屋根草の穂をふきとばす」と迄感覺を動かさずともよからふと思ふ。さう感じて、その風はいとはしかつたのだと云ふならばそれ迄だが、どうもその何れかが付けたりの様に響く。饒舌の舌足らず、と云ふ感がある。

第二首にしてが矢張り云ひ過ぎて意を盡してゐないのではあるまいか、もつと泌々と讀者の胸に響いてもいゝのであるが、さうでないのは腕にまかせて突切つてゐるせいではあるまいか。氏程の人は今はも早や來るべき歌の道の指針として直接吾等の胸に當つて來てもいゝのである。

（木枯）尾山毒舌先生の怪氣焔には時々驚かされるが、御作品はまだ日本一にはならないらしい。尾山さんの近頃の作品を見れば太い線で輕々とやつてゐられる手際は流石だが、少しく茶化した態度がありはせぬかと案じられる。それが或時は、放膽な新しい風味を齎す時もあり、或る場合は、遊び半分な不快な一首に終ることもある。然し、現在の様に神經衰弱な歌人の多い世の中に尾山さんの様な、虫のいい大家のあることは一つの愉快である。

続・酔風船（17）

千々和　久幸

おもしろおかしく

２０２５年４月号の編集後記でわたしは、この国が高度成長期を越えて曲がりなりにも「豊かさ」を手にしてからは、万事に「楽しさ」を求めるようになった、と書いた。それまでは「今日よりは明日」という生産性を基軸にした経営が当たり前だった。しかし社会が上昇期から成熟期に入ると、企業経営もプロセスより成果をどう分配するかが眼目になってくる。

成果の分配に「楽しさ」が求められるようになったのは、当然といえば当然の成り行きである。しかしここに「楽しさ」を突き抜けたユニークな会社がある。その会社の社是は「おもしろおかしく」である。労働を生きがいにまで高めたユニークな経営に、現役のビジネスマンであったわたしは眼を見張ったものである。わたしのような凡庸なビジネスマンの理解を超えた社是である。

社是と言えば、「高品質低コスト」とか「顧客の満足」とか「社会に貢献」あたりが通り相場だから、この社是には大きに興味をそそられた。ちなみにわたしが所属した会社の社是は「誠を貫く」であった。この社是だって並ではないと当時は思っていたのだが―。

さてその会社は京都市南区に本社を置く分析・計測機器の綜合メーカーである堀場製作所。創立は１９５３年（昭28）で販売先は自動車、半導体産業をはじめ新素材、エネルギー、鉄鋼、食品、バイオ、化学等多岐にわたる。２０１１年度の連結売上高２２４３百万円、グループ従業員８６６６名の中堅企業である。

（資料はマイクロソフトによる）

まず社長の堀場雅夫の経営（人生）哲学はこうである。

会社で働く場合、私たちは人生の多くの時間をその会社で過ごす。そうした会社での日常の生きがい、働きがいをもって「おもしろおかしく」過ごすことには絶対的な価値がある。…自分が好きな仕事に取り組んでいるときには、時間が経つのも忘れて没頭し、どんどん進めていくことができた。人から言われたことをやるのではなく、自分が心からやりたい仕事を作り出し、チャレンジすることで「おもしろおかしく」充実した人生を送ることが出来ると考えたのである、という。

「おもしろおかしく」のベースにある考え方は、個人的に言えばむしろ真っ当過ぎるくらい真っ当である。だが世俗と慣習に挟まれて暮らす常識人には、逆立ちしても出ない発想である。問題はこんな人を食ったようなフレーズをヌケヌケとまた真面目に掲げる社長の自在で、破天荒な発想にある。この経営理念は「働きがい」を「生きがい」にまで高めた社長の人生観にある。

時代は「楽しもう」から一歩先の「おもしろおかしく」生きようとする世紀に入ったのだ。この「おもしろおかしく」を社会一般がどの次元で理解し実践するか、言葉ほどにたやすくはあるまい。持ち時間の見えてきた今、わたしも残り時間を「おもしろおかしく」生きてみたいと念じている。

一頁公論（48）

生きててよかった

馬場　美信

昨年五月に私は突然血栓性脳梗塞で倒れました。偶々泊りに来ていた娘の咄嗟の緊急判断と救命救急センターの休日当直医が神経内科の医師であったということ、日赤の近くに住んでいるという幸運が重なり、片麻痺や感覚障害などの後遺症も残らず十日間で退院できました。ところが思いもよらない突然の病気は自分でも信じられないほど大きなショックでした。今もよくあの時を思い出します。

血栓を溶かす薬は脳梗塞が発症して三時間以内に投与しないと効果が無く、ＭＲＩで検査をしたりする時間が一時間くらいかかるので、発症後二時間以内が重要だということはご存知の方も多いでしょう。

多くの高齢者が血圧やコレステロールの薬を服用しているように、私も数年前から何種類かの薬を服用していましたが、高血圧やコレステロール等だけが脳梗塞の原因ではないようです。ストレスや運動不足、肥満等と同室に入院中の女性たちの原因はそれぞれ違っていました。

退院後、病院の指導に従い毎日の食事のカロリー、塩分、血圧、体重等をスマホのアプリで管理しています。今は体重も五kg減少し血圧もほどほど、血糖値も正常値になりました。先日スーパーでお米五kgの袋を持った時その重さによろけてしまいました。もちろんＢＭＩも正常の範囲になりました。

病を得て足るを知るという言葉があるそうです。病は必然であるととらえる謙虚さがあり、足るを知る者は富むという老子の言葉は物質的な豊かさを求め続ける現代社会において、とても重要なメッセージを持っています。

私たちはしばしば欲を出し過ぎ、もっと欲しい、これがあれば幸せになれると考え、次々と新しい目標や欲望を追い求めます。しかし本当の幸せはどれだけ多くを手に入れたかではなく、今あるものをどう感じるかだと思います。病気をして初めて健康であることの幸せに気付くのも足るを知ることでしょう。

よく痛い目に合わないと分からないと言いますが、足るを知る第一歩は、すでに自分が持っているものを受け入れることです。他人の価値観ではなく、自分の価値観に従うことが足るを知る生き方につながり、足るを知ることで最も重要なことは今の自分の健康な身体に感謝することだと思います。

倒れた時右の手足に軽い麻痺があったので言語野のある左脳が少しダメージを受けたのか退院後、しばらく短歌を詠むことに全く興味がわかなくなり詠めなくなりました。言葉が出てこなかったのです。

病気になって初めて健康であることが大切であるという当たり前のことに気づきました。そして、心配してくれた家族、周りの友人、知人の深い愛にあらためて感謝しています。

本当に生きててよかった。